

平成29年度 第2回 観察会 記録 (自主観察会)

日 時	平成29年5月9日 (火) 曇り
観察地	滋賀県大津市 龍谷大学瀬田キャンパス 「龍谷の森」
講 師	龍谷大学里山学研究センター・研究スタッフ/理工学部助手 林 珠乃先生
テー マ	龍谷大学の「里山学 (瀬田・田上地区の里山景観とその変遷)」と里山保全実習
備 考	参加者58名 記録 飯田正恒

1. 「里山学」講義: 10:00~11:45 3号館203教室にて

講義概要 (項目):

①里山の定義 ②その特徴 ③里山の生態系サービス ④里山のモザイク状景観 ⑤地域の環境史 ⑥瀬田・田上の山の今昔 ⑦田上の生態系サービス ⑧瀬田の里山の生態系サービス ⑨瀬田・田上における生態系サービスの変遷 ⑩瀬田・田上の生態系サービスの事例から学ぶこと ⑪里山の現状 ⑫里山学研究センター ⑬市民の関わり:「龍谷の森」里山保全の会 ⑭多様な植生の誘導と生態系サービスの活性化を目指して ⑮市民による現代的な里山利用に向かって

2. 今回の「里山学」受講で、参加者は里山のイメージをより鮮明にし、関心を高めることができたと思う。森里海のつながりを人の都合で短絡的に断ち切るとどうなるか、その格好の事例を瀬田・田上地方の「地域の環境史」で説明があった。飛鳥・奈良時代に田上山のヒノキを皆伐した後に頻発する、大戸川の洪水に悩まされ近世に至るまで長い年月を治山、治水に費やした歴史を振り返り、「里山学」は、地域の人と自然のつながりの歴史から過去の成功や失敗と対策を学ぶこと、また地域の特徴を把握した上で未来を考えることが必要と説く。以下、このことに関連した2つのエピソードを紹介する。

(1) ヨハネス・デ・レーケの考え方

明治初年、オランダから招いた土木技師ヨハネス・デレーケ(右写真)は、松方正義内務卿に「現在、下流の平野部に大変なトラブルをもたらしている(中略)破壊は決して自然にそうなったのではなく、人間のなせる技なのです。住民が(山の樹木を)根こそぎ取ってしまうという習慣を、強力で厳格な法律によって止めさせなければ、次世代にはこのあたりは砂だらけになり(中略)、すでに現時点でも平野部下流で土砂によるトラブルが大きくなっています」と、この国の嘆かわしい悪弊の一つを止めさせることを進言し、里山のオーバーユースを戒めている。(伊藤安男「蘭人工河川と治水思想」)



『京都歴史災害建久第2号』2004より)

ところが、明治18年に発生した淀川大水害がもとになって立法した「森林法」「河川法」「砂防法」は治水と砂防は内務省、治山は農商務省が管轄し、その基本的な考え方は「山は山で解決せよ、川は川で解決する」というものであり、治山、治水を水系一貫の原則が途絶え、デ・レーケの考え方とは遠いものになってしまった。(三宅雅子「乱流—オランダ人水理工師デ・レーケ」1992)

(2) 土砂止め奉行

江戸時代「土砂止め奉行」が藩の領域を越えて治山・治水を行なう広域行政を行なっていたという。明治時代にこの仕組みがなくなって縦割行政となってしまった。江戸時代のほうがよほど理にかなった治山・治水対策をしていたと聞く。

デ・レーケや土砂止め奉行達の先人の知恵とはどのようなものであったか、これらを学習する機会を設けたいと思っています。

2. 午後から隣接地の「龍谷の森」へ移動し、「薪割り」、「チッパー操作」、「芽搔き」、「小枝伐り」を体験する。ほとんどの人が初めての体験であり、それぞれの作業に熱心に取り組んでいただいた。

龍谷の森では通常、これらの作業は「里山保全の会」(2003年結成、龍谷大学教員と市民で構成。会員数105名、年間20数日活動)がボランティア活動で実施しているとのこと。里山に対する彼等の想いや意見を聞いて見たいと思ったが、その時間がなく断念した。今後「里山保全の会」の会員と意見交換する機会を見つけたい。

おわりに

今回スタッフの企画による自主観察会を始めて実施したが、お陰様で好評いただき、ホットしています。「里山学」の講義は、林先生の説明が大変に分かりやすく「里山」の理解におおいに役立ちました。また午後の薪割りなどの実習が予想以上に好評でした。

龍谷大学様にはお忙しいなか私たちの依頼を快く受入れていただき、昨年秋から現在まで林珠乃先生はじめ関係者の皆さまに大変お世話をおかげしました。紙面で改めてお礼を申し上げます。今後、「龍谷の森」をフィールドにして活動する会員が多くなることを願っています。

今後も日帰りで気軽に参加して頂ける観察会や勉強会を企画していきたいと思っています。

【龍谷の森】



